

【コンセプト】

音楽と災害文化のつくる唯一無二のホール

大きな穴、グラウンドホール

一つの場合、それぞれの風景

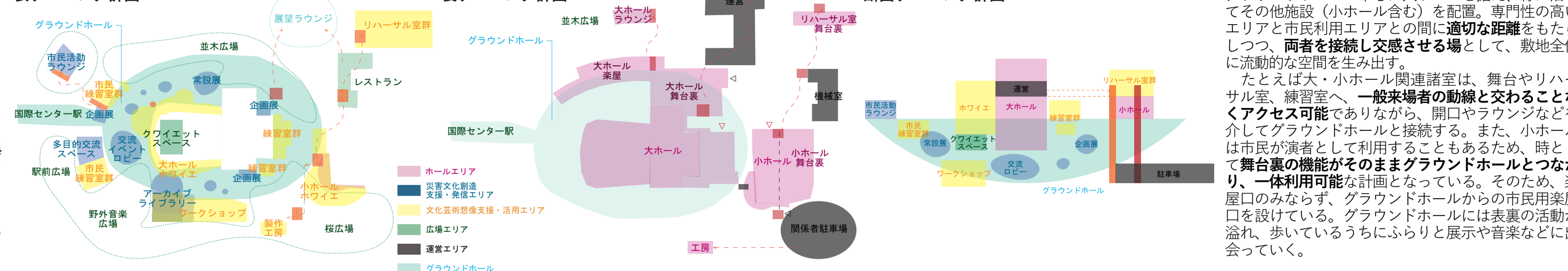
穴 / 水平線というシンボル

【表と裏が出会い、交感する場＝グラウンドホール】

表ゾーニング計画

裏ゾーニング計画

断面ゾーニング計画



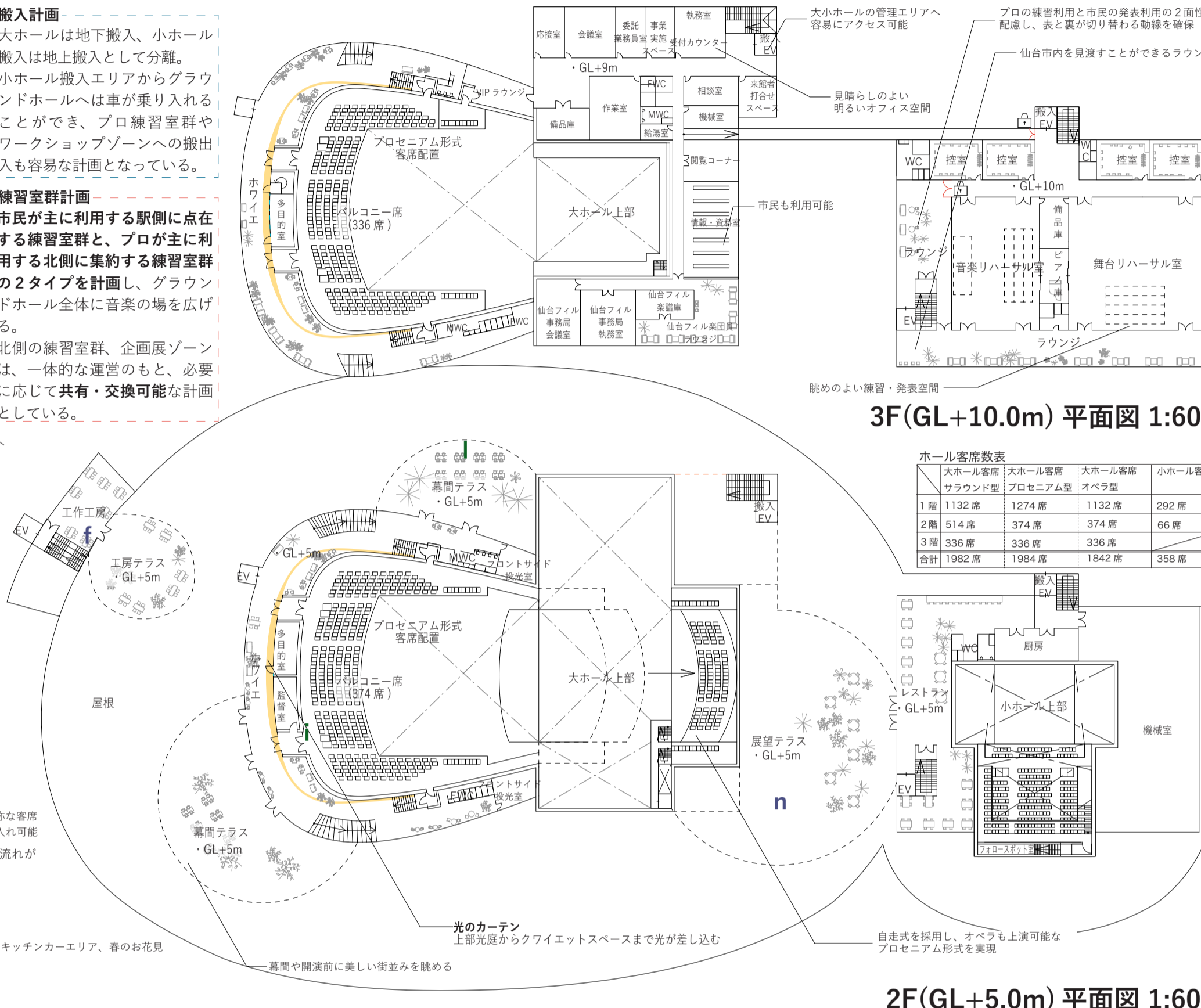
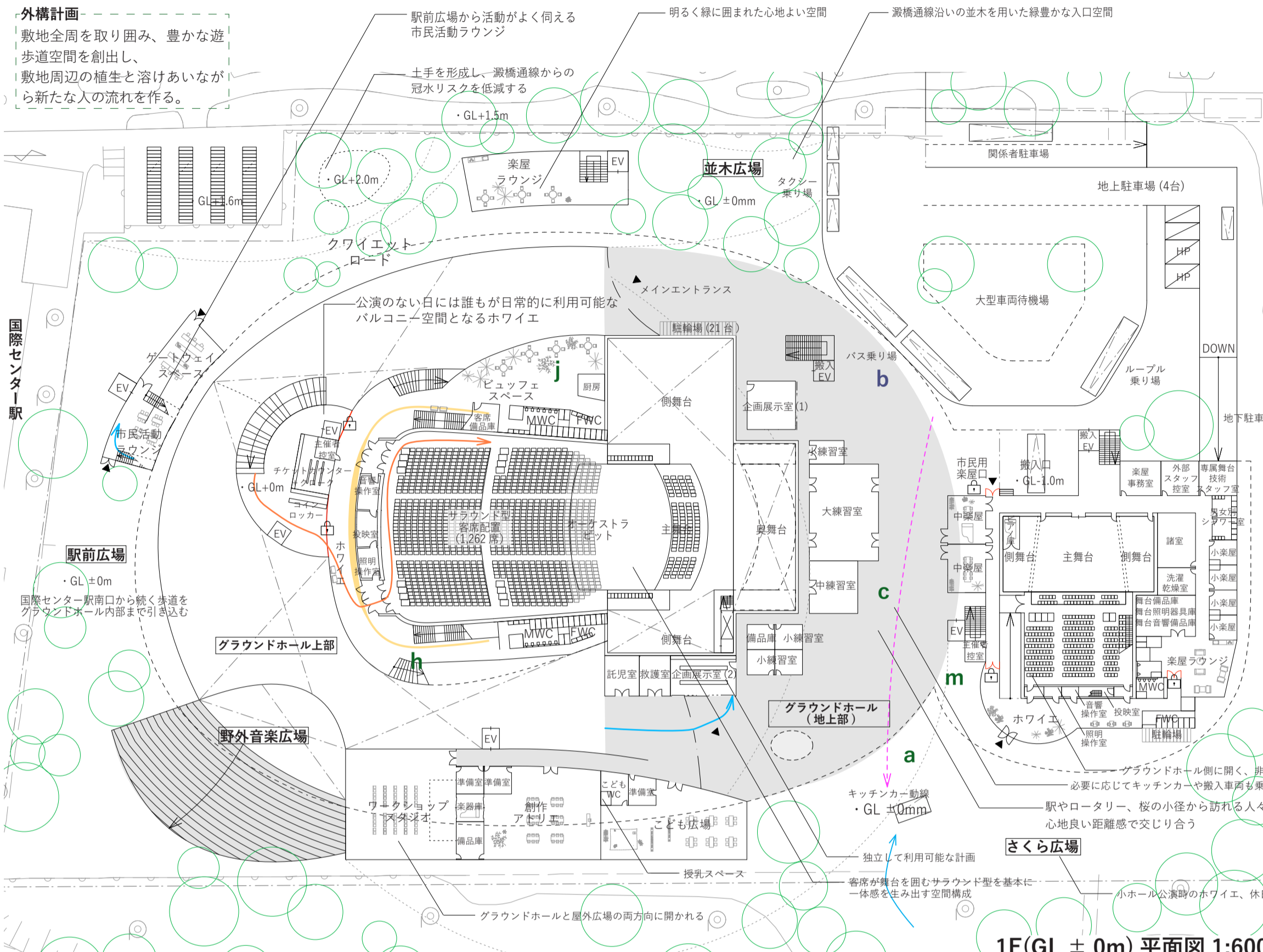
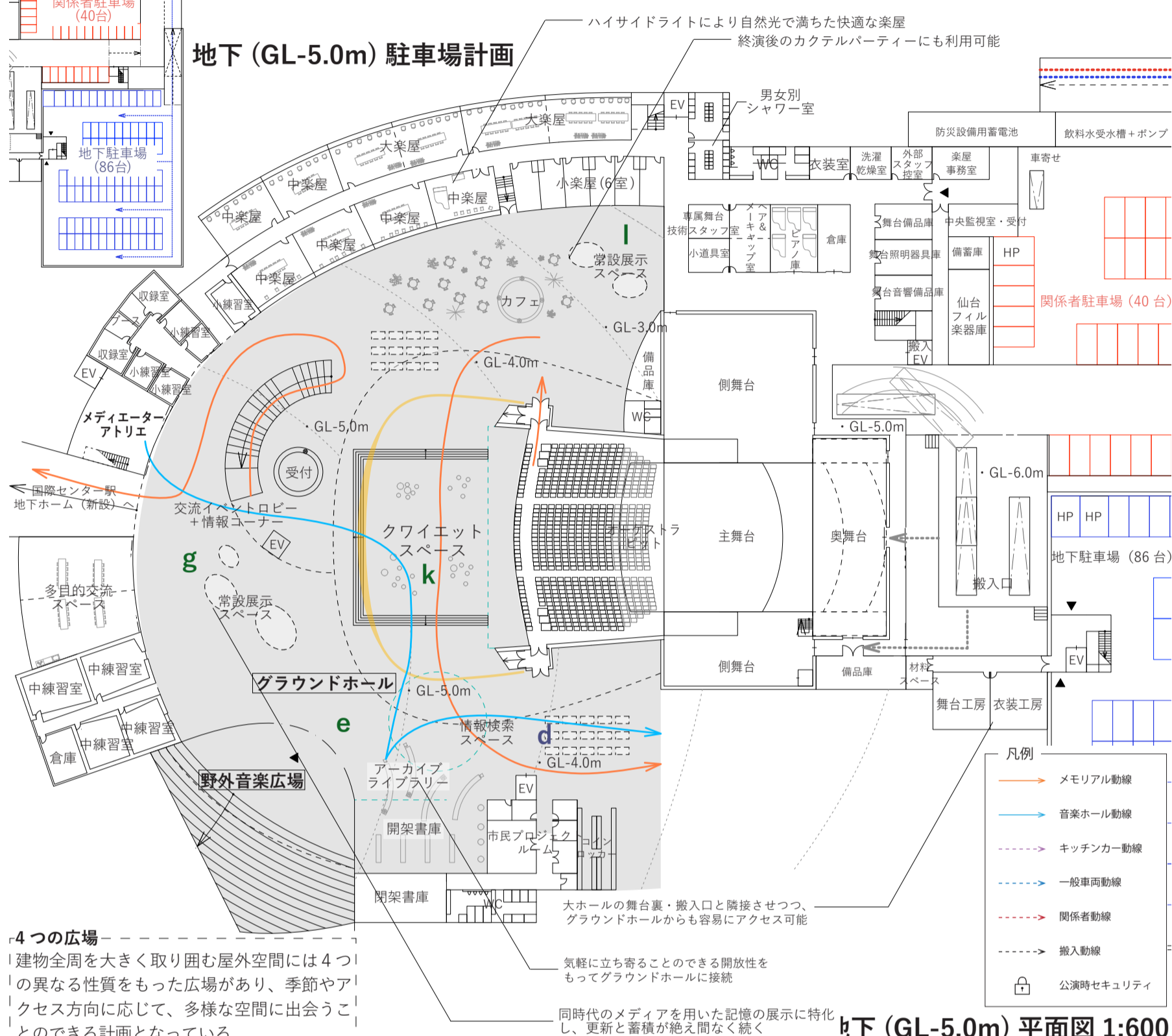
音楽を育む文化と、震災による災害文化をもつ仙台だからこそのホールをつくる。メモリアル空間の中央に大ホールを置き、さらにその周りを市民活動・音楽施設で取り囲む。そこではメモリアル施設の中でコンサートが催され、唯一無二のオーケストラが奏でられる。またあるときはギターの音色が響く中、記憶へ連なるような展示と出会う。

桜の小径や国際センター駅、大小ホールをつなぐ道であり、さまざまな活動を包含する広場であり、メモリアル展示空間であるグラウンドホール。コンサートをともに訪れた人、楽器の練習をする人、駅をおりて青葉山を散策する人。そんな日常風景の中に、言葉や文字、映像を介した震災の記憶展示が重なり、更新・蓄積され続ける。

ゆったりとしたスロープは、大地の記憶が刻まれた地層壁面を横切り、反響する音と頭上から差し込む光の中で、震災の記憶と未来の物語へ来場者を引き込む。目的も立場も異なる人たちが、同じ「一つの場合」にいると感じながらも、各々の記憶と共に「それぞれの風景」を見る。

震災メモリアル施設の拠点として、各々の異なる記憶を投影できる大きな器のようなホールをつくる。近景で視界を覆う大きな穴と屋根は、さまざまな立場の人を迎え入れる。遠景では大屋根が緑の中に沈む水平線となり、上部のホワイエやラウンジの活動が層気楼のように浮かび上がる。

せんだい青葉山グラウンドホール
—音と記憶が響きあう大きな穴—



a. さくら広場には小ホールホワイエとリハ・練習室の入口が並ぶ。見晴らしの良い3階ラウンジ・リハ室では、毎年ピアノの発表会があった。広場から直接楽屋に入ることができるので、本番前でも外で遊んでいた大好きな場所。

b. バスを降りるとロータリーの大屋根の下に着く。ここはグラウンドホール入口のひとつ。学生たちが楽器を練習室から小ホールに運んでいる。屋根が架かっているから雨の日でも濡れずに運べる。

f. グラウンドホールを見ろせる工作工房で、展示方法についての打ち合わせ。震災から20年以上が経つけれど、いろいろな人たちの記憶をつないでいきたい。

c. 日曜日はいつも大練習室で市民オケが練習をしている。小、中練習室は音楽だけでなく、市民サークルにも使われていたり。みんなの創造活動を支える場が、展のアイデアを練るために資料を調べよう。グラウンドホールのあちこちにある。

e. ゆったりとしたスロープを下ると、オープンなアーカイブライブラリーがある。今日は次回が楽器の演奏をしている。階段を客席にして野外コンサートをしていることも。床の展示映像と重なるように、楽器の音がグラウンドホールに響き、心地良い。

g. ホワイエへ向かうスロープを上る人の影がゆらゆらと見える。3層のホワイエの隙間から差しこむ光も人影で揺らめきながら、クワイエットスペースを抜ける。手前をぼんやり照らすのが好きだ。

h. 最上層のバルコニー席に向かい、ホワイエの階段を上って大屋根の下。ひんやりとした岩のような塊に腰を下ろして一息つく。グラウンドホールが賑やかなほどに、静かな空気がここには流れる。すぐそこなのに遠く感じられる。

i. 地中奥底へ潜り込んだような大ホール内部。観客がオーケストラを取り囲み、ショパンのピアノ協奏曲第一番が始まる。グラウンドホールで見た震災の展示と、故郷を追われたショパンの旋律が重なり、いつもより深く色鮮やかな音が耳の奥に響く。

m. 展示を見ながらグラウンドホールの傾斜をゆっくりあがり、さくら広場に戻ってきた。小ホールでは先ほど準備に追われていた吹奏楽部の発表会が始まる。夕間にホール内部が浮かび上がり、広場と一体となっていた。

d. ゆったりとしたスロープを下ると、オープンなアーカイブライブラリーがある。今日は次回が楽器の演奏をしている。階段を客席にして野外コンサートをしていることも。床の展示映像と重なるように、楽器の音がグラウンドホールに響き、心地良い。

e. 地層が見える大階段。練習室が近くにあり、いつも誰かのアークライブラリーがある。今日は次回が楽器の演奏をしている。階段を客席にして野外コンサートをしていることも。床の展示映像と重なるように、楽器の音がグラウンドホールに響き、心地良い。

g. ホワイエへ向かうスロープを上る人の影がゆらゆらと見える。3層のホワイエの隙間から差しこむ光も人影で揺らめきながら、クワイエットスペースを抜ける。手前をぼんやり照らすのが好きだ。

h. 最上層のバルコニー席に向かい、ホワイエの階段を上って大屋根の下。ひんやりとした岩のような塊に腰を下ろして一息つく。グラウンドホールが賑やかなほどに、静かな空気がここには流れる。すぐそこなのに遠く感じられる。

i. 地中奥底へ潜り込んだような大ホール内部。観客がオーケストラを取り囲み、ショパンのピアノ協奏曲第一番が始まる。グラウンドホールで見た震災の展示と、故郷を追われたショパンの旋律が重なり、いつもより深く色鮮やかな音が耳の奥に響く。

n. 考えが煮詰まるといつも大屋根の上の展望テラスに上る。緑と川の奥には街が広がり、さらに遠くの津波の被害にあった被災地を思う。離れたこの場所だからこそのことを考え続けたい。

【グラウンドホール内部展開イメージ】

